むきばんだ花だより 11月

2016. 11. 5

◎アキノキリンソウ （秋の黄輪草・秋の麒麟草）
キク科、アキノキリンソウ属

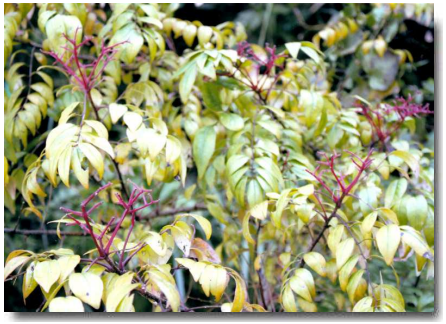
別名：アワダチソウ（ 泡立ち草） ○花言葉：警戒・用心・安心・奨励・幸せな人生。
○多年生草本
○名前の由来：花がベンケイソウ科のキリンソウに似ていて秋に咲くので
アキノキリンソウとなったと云う説が一般的です。なおキリンソウは黄色い花が
輪生状に付くことから「秋の黄輪草」となったようです。
「麒麟」の字を充てることがありますが、伝説上の動物、麒麟とは無関係のようです。
日当たりのよい明るい場所に生え、日本全土に分布し、かっては、里山に囲まれた
水田の周辺、ため池の土手などにごく普通に見られ、秋草の代表であるリンドウ等と
共に、黄金色の花が咲く代表的な花でしたがそのような環境の減少や荒廃によって
場所が少なくなり、「秋の道端の黄色い花は」同属で(嫌われ者の？)帰化植物の
「セイタカアワダチソウ」に取って変わられた感が有ります。
○アキノキリンソウの若葉は食べられます。塩を入れて熱湯で茹で水にさらしアク抜き
を十分にしゴマ和え、お浸しにする(濃い目の味付けが良い)。また、陰干しにしたもの
は薬用にもなる。○生薬名：一枝黄花(いっしこうか)と云われ健胃、利尿作用や腎臓,
膀胱炎、喉の腫れや痛み、腫物、解毒等に用いられます。
★撮影日：2016,11,5, ★撮影場所：むきばんだ公園入口

◎セイタカアワダチソウ （背高泡立草）
キク科、アキノキリンソウ属

別名：セイタカアキノキリンソウ ○花言葉：元気、生命力、唯我独尊
北米が原産地の多年草。高さ1～3mにもなる。明治時代末期に観賞として
輸入され、1株数千個の種子と地下茎で一気に全国に広がった。かっては
花粉症の元凶とされていたが，花粉が重く、遠くまで飛散しないため現在は
否定されている。日本では代萩とも呼び、切り花用の観賞植物としてハギ(萩)
の代用に用いられたり、同様に茎を乾燥し萩の代用として「すだれ」の材料
に利用される。
★撮影日：2016,11,5 ★撮影場所：むきばんだ公園途中

◎カニクサ （蟹草）フサシダ科，カニクサ属

別名：ツルシノブ ○多年生シダで蔓性、名前の由来：蟹草で、
子供が蟹を釣り上げるのに用いたことに由来する。また、シダ
類には珍しい巻き付く形の植物で別名「ツルシノブ」は,これに
由来する。蔓を使ってカゴを編んだりに利用される。
○日本中部以南に分布し、長く伸びる蔓は、実は1枚の葉で、
本当の茎は地下で横に這い、先端から一枚の葉を地上に伸ばす。
株が小さいうちは短く,次第に長い葉を出すようになり2mを超え
ます。冬は枯れることが多いが温暖な地域では枯れずに残る。
この長い蔓の部分は茎ではなく葉の主軸で他の植物に絡み付
いているだけです。この主軸沿いに、羽片が左右にほぼ対をなし
て出て特殊な形の3回羽状複葉になります。小葉には胞子の着く
ものと着かないものがあり、「フユノハナワラビ」のように、羽片ごとに
胞子葉と栄養葉が分かれているようです。○中国では海金沙(カイ
キンシャ)の生薬名で解熱,解毒,淋病,利尿に煎用されています。
★撮影日：2016,11,5 ★撮影場所：むきばんだ公園入口



◎イヌザンショウ （犬山椒）ミカン科、サンショウ属

名前の由来：サンショウに似ていて異なるので「似て非なるもの」
の「非(イナ)」から転訛しイヌザンショウとなったと云います。
しばしば「犬」の名が付けられた植物の名は人の役に立たない
から「イヌ(犬)」であると説明がされますが、古来「イヌ」は狩猟や
牧羊など有用な動物であり疑問です。○道ばたや林の縁でよく
見かける樹木です。食用のサンショウは春に開花するのに対し、
イヌザンショウは夏に開花し香りが悪いので香辛料として利用し
ません。秋になると花柄が紅くなり、サンゴの枝のように美しくな
ります。○果実を青椒(セイショウ)と呼び咳止め、消炎に用います。
また揮発油を含むので昔は灯油として利用したと云います。
★撮影日：2016,11,5 ★撮影場所：むきばんだ公園出口

◎イヌビワ （犬枇杷）クワ科、イチジク属

雌雄異株、落葉広葉低木、別名：イタビ(姫枇杷)・コイチジク・
ヤマビワ・カラビワ。名前の由来：ビワに似ているが、食べても
美味しくない役に立たないことから。関東地方以西の沿岸地
や丘陵地に多く生育します。イヌビワはビワと云う名前が付い
ていますが、ビワの仲間でなくて。イチジク(無花果)の仲間です。
イチジク花は、丸くなった花嚢(かのう)の内側に花を付けます。
植物の仲間としては、かなり特殊な花の咲き方をします。果実
は果嚢(かのう)で、10~11月に黒紫色に熟します。雌果嚢は、
美味しく食べられますが,雄果嚢は硬くて食べられません。
○縄文時代の遺跡からイヌビワノ木部を細かく裂いてカゴを編
んだものが出土しています。
★撮影日：2016,11,5 ★撮影場所：むきばんだ公園入口

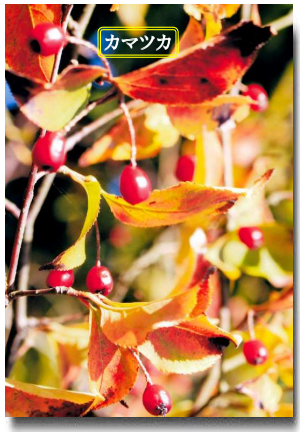
◎クロキ （黒木） ハイノキ科、ハイノキ属
常緑の小高木　西日本の海岸沿いを中心に自生する。
名前の由来:「幹が黒いために黒木と云う」とする説もありますが、灰褐色や白に近い幹が多く。黒木と云う名前は、枝葉を燃やした後に生じる灰汁を染料(黒)に使ったことに由来すると考えた方が馴染みやすい様です。地衣類が付着して白っぽく見えるという説もあります。○春と秋の年2回、花を咲かせる風変わりな性質を持っていて、春の花は白あるいは薄緑色、秋の花は紫色になります。春の花が正常花で、秋の花は奇形花と呼ばれ雄蕊や雌蕊も揃っていますが、果粉は出ないようです。「不思議？」
★撮影日:2016,11,5　★撮影場所:洞ノ原地区入口

◎キミノシロダモ （黄実の白だも）
クスノキ科、シロダモ属、常緑広葉樹、雄雌異株
別名:ウラジロダモ、タデ、タモ、シロタブ、タマガラ
名前の由来:葉の裏が白いことからシロで、ダモはタブからの転訛と云われます。○シロダモは秋遅く果実が熟しますが果実の色は赤です。ごく稀に黄色な実の成る「キミノシロダモ」(四国に多い)と呼ばれる樹があります、これもシロダモの品種とされています。○「キミノシロダモ」は固定品種になっていないのでその種から発芽し生長した子孫も雑種一代では全て赤実になり、雑種第二代以降に再びひょつこり黄実が出現する。この様なことも考えられます。「面白くて、珍しい樹ですね。？」
★撮影日:2016,11,5　★撮影場所:洞ノ原地区地区

◎イヌホオズキ （犬酸漿）ナス科、ナス属、一年草
別名:バカナス(馬鹿茄子)・花言葉:嘘、嘘つき，真実
名前の由来:否(いな)ホオズキで、ホオズキに似ているがホオズキでは無いという意味から転訛して、イヌホオズキの名になった。ホオズキや茄子に似ているが役に立たないことからとの説もある。日本全土に分布する。古い時代に渡来したものと云われる。
茎は30~60cm枝分かれが多い、8~10月にナス状の花を開く、花後、枝は下垂して直径7~10㎜の黒い球形の果実が熟し、甘い味がするという。○生の果実や開花期の根を含んだ全草を、天日で乾燥したものを，生薬名「竜葵(りゅうき)」と呼び、解熱・利尿に，また腫物、疲労回復用酒(竜葵酒)として飲用する。
○果実は一般的には有毒で吐瀉、下痢をおこすので注意。
★撮影日:2016,11,5　★撮影場所:洞ノ原地区入口

◎ノコンギク （野紺菊） キク亜科、シオン属
別名:ノギク、コンギク、ナンヨウシュンギク(南洋春菊)
名前の由来:コンギクが紺菊で、ノコンギクは「野生のコンギク」のこと。日本が原産で本州から九州にかけて分布する。
開花時期は8月~11月。
花色は白色から薄紫色、道端でよく見かける植物。ヨメナに非常に似ていることから、新芽を摘んで食べられることもある。食べるうえでは害はないが、毛が生えているので口触りは多少良くないようです。他に若い花なども食料になる。ただし種内の変異は大きく、同種とされるものには、かなり見かけの異なるものもあります。花言葉:守護、指導、長寿と幸福、忘れられない想い。
★撮影日:2016,11,5　★撮影場所:弥生の館裏

◎イボタノキ （水蝋樹、疣取木）、モクセイ科、
イボタノキ属 ・落葉低木 ・雌雄異株 ○別名:イボタ、イボタン、カワネズミモチ、トバシリ、トスベリ。
名前の由来:イボタノキに寄生するイボタカイガラムシ(イボタロウムシ)が分泌する良質の蝋が疣(いぼ)を取る薬になつたことから「疣を取る木」が転訛してイボタノキとなった。○花言葉:良い友を持っている。日本では、全国に分布する、各地の山野の明るい、崩落地などにもよく見られる。草丈は1.5~2mで枝先に筒状の白い小さな花を密集して付ける。樹皮上に寄生するイボタロウムシの分泌する白いロウが蝋燭の原料や桐タンスの艶出し、襖の滑り剤に用いられる。○民間薬として強壮、止血に用いたり、材は堅いので印や杖に利用された。
★撮影日:2016,11,5　★撮影場所:公園 出口山側



★むきばんだを歩く会★

- **指導：鷲見寛幸先生（鳥取県自然観察指導員）**
- **毎月第１土曜日午前９時３０分～正午**
- **入会金　２０００円　　毎回資料代　３００円　　いつでも、どなたでも入会可能です**
- **問い合わせ：むきばんだ応援団「むきばんだをあるく会」**